

平成22年鉄鋼流通団体合同賀詞交歓会を開催

平成22年の鉄鋼流通団体合同賀詞交歓会は、1月15日(金)午後5時より、ロイヤルパークホテル3階のロイヤルホールで盛大に開催された。

定刻20分前に会場入り口に関係団体の長が居並び、立礼を交わしながら入場が始まった。

出席者は来賓として経済産業省製造産業局鉄鋼課の小糸正樹課長、葛岡制紀課長補佐、鉄鋼業界からは鉄鋼産業懇談会の内田耕造会長（新日本製鉄・代表取締役副社長）、同懇談会厚板部会の相川貢部会長（JFEスチール・専務執行役員）をはじめとしたメーカー、商社、関連機械メーカーの方々、関係ユーザー団体、報道関係の方々に加えて、全国各地からの会員・組合員など約640名が参集した。

定刻には、主催6団体の代表が登壇し、主催者を代表して全国コイルセンター工業組合の鈴木貴士理事長が開会の挨拶を行った。次に、経済産業省の小糸正樹鉄鋼課長より祝辞が述べられ、引き続き内田耕造・鉄鋼産業懇談会会長のご発声で乾杯が行われ、和やかな懇談に移った。

午後6時30分に至り、関東コイルセンター工業会の村山和雄会長より中締めが行なわれ散会となった。

1. 鈴木全国コイルセンター工業組合理事長の挨拶

昨今の頃は不安感が大変広がり、どこまで景気が悪くなるのかという悲観論がまかり通っていた。資本主義が崩壊する、ドルが基軸通貨でなくなるといった話もあった。実際に昨年1～3月はかなり悪い状況であったが、世界各国が経済政策を相次いで打ち出した結果、マクロ的には1～3月が底となり、4月から徐々に回復してきた。外需と内需、大企業と中小企業、都市と地方の間で、それぞれ格差が広がるなどまだまだ厳しいとはいえ、昨今の頃は多少気分が楽になっている状況だ。我々鉄鋼流通も新しいステージに立ったと考えている。昨年は政権交代があり、米国も大統領が変わるなど、変化の年であったが、我々の業界もリーマン・ショック以来の不況を経て変わらざるを得なくなっている。寅年に引っ掛けて言えば、「虎穴に入らずんば、虎子を得ず」との格言があるように、勇気をもって事にあたらないと成功はおぼつかない。また『君子豹変す』『大人虎変す』という言葉の本来の意味にあやかって言えば、豹や虎の毛が鮮やかに抜け変わるように、我々も激動の時代において見事に変わらなくてはならない。鉄鋼流通は鉄鋼業界になくてはならない存在と自負している

が、安閑とはしてはいられない。その責務を見事にまっとうするべく、鮮やかに自らを変革していきたい。今年はまだまだ厳しい状況が続くと思うが、気持ちだけは明るく前向きに持っていきたい。

2. 小糸経済産業省鉄鋼課長のご祝辞

引き続き厳しい経済情勢が続いており、短期では経済対策、中長期では成長戦略でしっかりとした施策体系を構築して、産業界をサポートしていくのが我々の使命だ。現在は循環的な景気の変化だけではなく、経済に様々な構造変化が起きつつある。その中で、国内市場では、最適な事業体制を迫るとともに、一層の競争力強化やコスト改革を進めることが求められる。そうした課題にどう取り組んでいくかも皆様の大きな課題になる。公共事業でも従来のように枠で保証される世界から、1件1件どのようなプロジェクトが日本の成長に必要な厳しく吟味される時代になっている。このため、ビジネスでももう少し垂直方向に連携しながらプロジェクトを提案するようないり方が必要になるのではないかと。また、成長の源泉はアジアなど海外にあるので、チャンスがあれば海外でどういう展開をしていくかも重要。「君子豹変す」というお話もあったが、「虎穴に入る」リスクを低減するお手伝いをするのが我々行政の施策の柱となる。皆様に提案をいただき緊密に連携しながら施策運営に努めたい。

3. 内田鉄鋼産業懇談会会長のご祝辞

昨年は10～12月の粗鋼生産量が1～3月に比べ5割増えるなど激動の年であった。10～12月は85%レベルまで回復したが、外需がリーマン・ショック以前に比べ20%増えたのに対し、内需は25%減少した。まさに外需がけん引している形だ。内需については製造業が緩やかに回復し、ピーク時に比べマイナス20%まで戻っているものの、建設分野はここにきてむしろ悪化している。2極化がさらに進み、自律的な回復までには程遠い状況だ。建設業については個人的には今の状況は異常であり、必ず戻ってくると思っているが、回復の時期が今の段階で見えないことがマーケットの悲壮感につながっている。ただ、昨年12月から年初にかけてアジアを中心に海外需要が非常に伸びており、鉄鋼需給は落ち着いてきた。アジアでは建設分野でも非常にひっ迫感が出ている。今後外需の拡大が内需にどのような影響を与えるかは不透明だが、アジアで需要が伸びていることは明るい材料。加えて、日本の製造業が高い技術力と製品競争力を生かし、自ら需要を創出して海外需要を取り込みながら回復していることも明るい材料になっている。経済産業省の需要見通しでは今年1～3月も昨年10～12

月の勢いが続く。昨年に比べスタート台が高くなるので、大きな変動がなければ今年も大きく回復すると期待している。マーケットにはまだまだ不透明感があり、変動するリスクも高い。景気回復には時間がかかるかも知れないが、建材分野も含め必ず回復する。現在の状況を前提に足腰を鍛え、強い企業体質を作ることが重要だ。またアジアの市場は大きく変動するので、内需も激しく変化する可能性がある。実需見合いの生産や在庫管理などを通じ、マーケットを大切にすることが将来の発展につながる。今年も鉄鋼業の将来にとって大変重要な年になると思うが、一丸となってこの難局を乗り切っていきたい。

4. 村山関東コイルセンター工業会会長の中締め

今年も様々な課題が山積しているが、今年こそ基幹産業に携わる鉄鋼流通として、自信と誇りを持って底力を発揮する時だと考えている。

(三本締めで閉会)

以上